



INMP ニュースレター

第9号 (2014年11月)

翻訳：藤田明史・山根和代・安斎育郎

日本語版発行
安斎科学・平和事務所
〒600-8216 京都市
下京区東塩小路 547-4
ステーションコートヤード 802 号
FAX:075-740-7282

第8回国際平和博物館会議、盛会裏に開かる

2014年9月19日～22日、35カ国から175人もの人々が、韓国ノグンリ平和公園で開催された「第8回国際平和博物館会議」に参加しました。会議のテーマは、「戦争の防止、および記憶・歴史的真相・和解の促進における平和博物館の役割」というものでした。世界の平和・人権博物館の関係者、平和教育家、活動家、芸術家がそれぞれの活動について紹介し、議論に加わり、友情と協働を深めました。

次の方々が、歓迎の挨拶、祝福のメッセージ、基調講演を行ないました。

ジョン・ジョンソプ（安全行政部長官）、パク・セボク（永同郡郡守）、イ・ムンギョ（済州 43 平和財団理事長）、小溝泰義（広島平和財団理事長）、オスカー・アリアス・サンチェス（元コスタリカ大統領・ノーベル平和賞受賞者、ビデオメッセージ）、チャールズ・ハンリー（元 AP 通信記者、ピューリッツァ賞受賞者）ほか。

これらのスピーチや会議・パネル・ポスターセッションでのすべての発表は、450 頁の大部の会議記録として刊行され、登録したすべての参加者に配布されましたが、会議テーマに関する重要な貢献となるでしょう。これとは別に論文集も近く公刊されることになっています。

会議のテーマ、地理的な近さ、平和博物館の数といった点から考えて、日本から 60 名もの参加者があったことは驚くには当たりませんが、INMP 理事である山根和代博士や安斎育郎博士の広報や翻訳のための努力は銘記されるべきでしょう。

参加者はいくつもの記念碑のある美しいそして印象的なノグンリ平和公園を訪れ、合間に行われたさまざまな文化行事に参加し、最終日には DMZ（非武装地帯）にあるイムジンガクを訪れました。そして、国家分断が今なお続いている悲惨な現実注意到注意を喚起し、朝鮮半島およびより広い地域の平和を保障する六者協議の再開を促す声明を発表しました。

INMP はノグンリ国際平和財団およびその議長であるチャン・クドー氏らが私たちがを歓迎し、このような素晴らしいそして長く記憶に残る会議を組織されたことに深い感謝の意を表明します。



第8回国際平和博物館会議（韓国・ノグンリ、2014年9月19日～22日）



総会および理事会

2014年9月20日



ノグンリ平和公園で行われた第8回国際平和博物館会議の開催中、9月20日にINMP総会が、参加した理事会メンバーによる2回の理事会を受けた形で開催されました。総会にはその多くがINMPのメンバーである50名近い出席者がありました。

2011年5月にバルセロナにて開催された第7回会議後の3年間のINMPの活動について、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン統括コーディネータから報告がありました。主要な問題は、組織の発展、会員、ニューズレター、刊行物、新たな平和博物館の開設・展示・プロジェクトなどの情報、収支についてでした。報告内容はINMPのウェブサイトで見ることができます。INMPへの財政支援に関連して、「ダッチ・ヴィアンド」(Dutch vfund)への申請が不首尾に終わったことが報告されましたが、同ファンドの責任者が2014年12月上旬にINMP事務局を訪問して再応募の可能性についての事情聴取が行われる予定であることも紹介されました。事情聴取を踏まえて、財政支援の可能性について同ファンドから意向が伝えられることになっています。

INMP事務局体制の今後について

現在、INMPは財政的困難に直面しています。資金残高に余裕がないため、大変残念ですが、事務局体制を廃止する方向をとることが決められました。現在の有給の非常勤事務局員だったニケ・リスカルジェットさんとの契約も停止せざるを得ません。彼女は専門的力量を発揮してINMPに大きく貢献してきましたが、5年目の契約が終わる数週間前(2014年末)に辞めることとなります。私たちは、彼女がINMP基礎づくりに大きな役割を果たしてくれたことに謝意を表しますが、今後は彼女の助力なしにネットワークを運営しなければなりません。

理事会と総会の議論の中で、INMPの再活性化について多くの提案がなされました。いくつかの国際平和NGOは事務所も有給事務局員も置かずに機能していることが指摘されました。会議の後、総会議長を務めたロイ・タマシロ理事が、多様な代替案をまとめ、理事全員に送付しました。INMPが今後どのように行動していくかについて検討するため、緊急の理事会が開催されることになっています。INMPは、検討内容をニューズレターやウェブサイトを通じて会員にお知らせする予定です。

INMP 会員による展示計画

ノーベル平和センター (オスロ、ノルウェー)

- ◇ 「民主主義を」 (2014年11月23日まで)
- ◇ 「化学兵器とたたかう」 (同12月7日まで)
- ◇ 「私の言うこと分かる？」 (2015年2月1日まで)
- ◇ 「1964マーティン・ルーサー・キング・ジュニア」 (2015年2月22日まで)

右の写真は「ノーベル平和賞展示会 2014」
(2014年12月12日～2015年4月12日)



立命館大学国際平和ミュージアム (京都、日本)

- ◇ 「ピース・スタイル」 (2014年12月14日まで) →

市役所 (ヘームスケルク、オランダ)

- ◇ 「平和市長会議」 (2014年12月10日～29日)



上はヘームスベルグ風景。アムステルダム
の約20km北西。

フレデンス・フス〈平和の家〉(ウプサラ、スウェーデン)

◇「P.K. (政治的に正しい) (2014年12月31日まで)

*P.K.は英語では P.C.で「差別や偏見を含まない表現」を意味するが、皮肉を込めてそう表現する場合もある。



ヒューマニティ・ハウス〈人間性ミュージアム〉(ハーグ、オランダ)

◇「フェア・ファッション・ラボー私たちが身に着けるもの」 (2014年12月31日まで)



国際赤十字・赤新月ミュージアム (ジュネーヴ、スイス)

◇「あまりに人間的な—20世紀~21世紀の芸術家と苦難」 → (2015年1月4日まで)

◇「真実の体験—ガンジーと非暴力のイメージ」 (2015年4月15日~2016年1月3日)

エーリッヒ・マリア・レマルク平和センター (オスナブリュック、ドイツ)

◇「イーペルわが愛」 (2015年1月18日まで)



イーペルは、ベルギー西部、フランデレン地域のウェスト=フランデレン州にある都市。第一次世界大戦中、ドイツ軍と連合軍の戦いの最前線となって熾烈な戦いが繰り広げられ、「第一次イーペルの戦い」や「第二次イーペルの戦い」などで一時は廃墟と化した。4年に及ぶ戦闘で戦死者は30万人、負傷者は120万人と伝えられる。イーペル市は「フランドル戦争資料館」を設置している。

ゲルニカ平和博物館 (ゲルニカールモ、スペイン)

◇「スペイン内戦と映画」 (2015年3月15日まで)

◇「文明間対話」 (2015年3月29日まで) 後掲記事参照。

ゲルニカ平和博物館では、2005年に第5回国際平和博物館会議が開かれました。館長のイラッチェ・モモイティオ・アストリカさんはINMP理事。

平和へのイニシャティヴ・ワーキンググループ (グルースベーク、オランダ)

◇「原爆と人間」展 (2015年7月15日~8月15日)

平和博物館 (ブラッドフォード、イギリス)

◇選択 (2016年2月26日まで)

ウィーン平和ミュージアム (ウィーン、オーストリア)

◇「平和の窓」 (2016年6月まで) →ノグンリでの展示



文明間対話

「芸術と詩は、威厳・尊敬・自尊心、表現の自由・想像力・個人の自覚・創造性・美德・人権を鼓舞する」(ジャン・ジョーダン『人間性のための芸術』)。

『文明間対話』は35カ国およびダーバン(南アフリカ)の6つの姉妹都市を代表する芸術家と詩人の共同作業です。参加者は、「アイデンティティ、土地、モノ、および信仰」というテーマについて作品を創造するよう要請されました。この展示を通じて、42名のビジュアル芸術家と41名の詩人が、自らの、あるいは、彼らが代表する様々な共同体の関心事を発信しています。



『文明間対話』は、人々に芸術と詩によって表現される内在的価値を喚起します。これらの価値は、個人の権利そして自立とともに、創造性、表現の自由、人権、卓越性、自尊心、インスピレーション、反省、文化的伝統などを含むものです。

展示は、芸術を通じて、人種差別、外国人嫌い、難民の窮状に対する抗議を表現しようとするものです。プロジェクトでは、アフリカおよびその他の国からの芸術家や詩人も共同しています。

「人間のための芸術」(Art for Humanity)は1つの組織であり、ビジュアル・アートに特化し、南アフリカに発しアフリカ全体さらには世界に作品を広めようとしています。展示は、スペインのゲルニカ・ミュージアムで2015年3月29日まで行われます。



ピース・マスク・プロジェクト



ピース・マスク・プロジェクトは、芸術、文化間対話、ワークショップ、展示を通じて、平和のための共通の見方を勇気づけるための非営利活動です。こうした努力は、「日本と韓国ライフ・マスク 2002」として、2002年ワールド・カップの日韓共同開催を祝福するプロジェクトとして始まりました。

それ以後、ピース・マスク・プロジェクトは、カンボジア、インド、韓国、スペイン、アメリカなどで、対話・ワークショップ・展示を行なってきました。

最近の野心的なプロジェクトである「ピース・マスク東アジア」は、中国・日本・韓国の人々が、平和を求めて地域主体で取り組んだものです。創造力と未来への展望を信じ、「ピース・マスク東アジア」は、3か国の若者たちは未来の平和創造者となり、東アジアの人々相互間の信頼関係を築くことに力を注ぐでしょう。

2014年9月には、韓国で開催された第8回国際平和博物館会議でもピース・マスクの制作と展示が行われ、たくさんの好意的な反応が寄せられました。



ピース・マスク・アーティスト
キム・ミョンヒさん(左)



ピース・トレイル・ザ・ハーグ

9月20日、ハーグでの「公正な平和」週間の終わりに、INMP事務局のニケ・リスカルジェットさんは、プロジェクト「ディスカバー・ピース・イン・ヨーロッパ（ヨーロッパで平和を見つけよう）」の一環として作成された『ピース・トレイル・ザ・ハーグ・ポケット・ガイド』（ハーグ平和の足跡ポケット・ガイド）を関係者に贈呈しました。この冊子は、平和と国際的正義についてのハーグの伝統に関わる15の歴史的な場所を紹介しています。

2012年9月以来、INMPはベルリン、ブダペスト、マンチェスター、パリ、トリノ、ウィーンのヨーロッパ6都市の協力者とともにこのプロジェクトを開始しました。合計7つのピース・トレイルが計画され、ウェブサイトに掲載されました（discoverpeace.eu）。2014年度の「国際平和の日」を記念して、このポケット・ガイドが各言語と英語で紹介されました。

最初の一冊が「イー・ジュン平和博物館」（YI Jun Peace Museum）のリー夫妻に贈呈され、二冊目はピース・トレイルに含まれるもう1つの平和博物館である「ヒューマニティ・ハウス（人間性ミュージアム）」にプレゼントされました。「公正な平和」週間の週末には、両ミュージアムとも1ユーロで入館できました。

同日、シティー・センター内の「ワン・フェスティバル（ONE Festival）」で、三冊目の冊子が2014年の「PAX 平和大使」のティム・アッカーマンに手渡されました。アッカーマンさんは、ガイドの序文を書いている方です。司会をしていたハーグのコメディアンシャーク・ブラルさんがニケ・リスカルジェットをステージに招き、このプロジェクトについてインタビューしました。ブラルさんは大いに興味を示し、その週の後半、ラジオのインタビューに彼女を招きました。ピース・トレイルに参加しているいくつかのミュージアムで、このガイド・ブックのコピーを無料で入手することができます。

プロジェクトに関する詳しい情報はウェブサイトをご覧ください（www.discoverpeace.eu）。またフェイスブックで“Peace Trial The Hague & discover peace”をフォローすることもできます。



出版物



『知られざる戦士—ベルタ・フォン・ズットナーを記念して』

（原題：Der unbekannte Soldat）

◇著者：INMP 会員 シュテファン・フランケンバーガー

◇出版社：Mono Verlag, Vienna（55頁+CD）ISBN:978-3902727527 ◇言語：ドイツ語

『知られざる戦士』は、平和主義の最初の大使であるベルタ・フォン・ズットナーへの賛歌です。平和主義が「武器のない世界」についての明確な理論をもつずっと前に、そしてこの世界が破壊されるず

っと前に、彼女は事実として平和主義の思想をもっていました。

本書は、ズットナーの伝記についての詳細な記述とともに、彼女の思想の歴史的・理論的な背景についても多くを教えてください。本書には、歴史家のマリア・エニクルメア、ゲオルグ・ハマン、心理学者にして平和運動家であるスザンヌ・ヤルカ、『オーストリア週刊プロフィール (Austrian weekly profil)』編集長のヘルベルト・ラックナー、著名な EU および UN の外交官ヴォルフガング・ペトリッシュへのインタビューも掲載荒れています。

CD でズットナーの広範な著作を聞くことができます。バックグラウンド・ミュージックはルーカス・ラウアーマン (チェロ)、ロバート・マイス (トロンボーン)、フランケンバーガー (ギター、ドラム/パーカッション、ピアノ、サウンド・デザイン) が演奏しています。テキスト自体は、ズットナーの著書、書簡、講演からとられたもので、オーストリア軍の大佐、大尉、事務官、補充兵によって朗読されています。現実を思い起こさせる語り口は、ズットナーの平和な世界に関する思想や理想への包括的かつ近代的なアプローチに道を拓いています—現実にはまだ戦争の脅威から逃れられないでいますが…。



『第8回国際平和博物館会議予稿集』



編集：チャン・クドー (ノグンリ国際平和財団) 459頁

2014年9月19日～22日に、韓国・ノグンリで開催された第8回国際平和博物館会議での報告論文集。会議テーマは「戦争防止および記憶、歴史的真相、和解増進のための平和博物館の役割」。これまでの国際平和博物館史上、最も分厚い予稿集となりました。

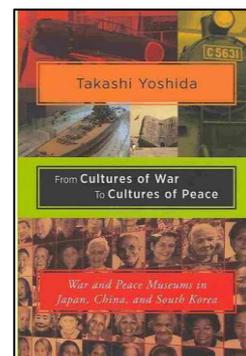
Also available as PDF on the INMP website.



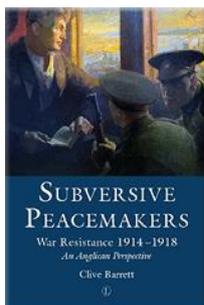
『戦争の文化から平和の文化へ —日本・中国・韓国の戦争・平和博物館』

著者：吉田俊 (よしだ・たかし) ウェスタン・ミシガン大学
マーウィンエイシャ (ポートランド) 308頁
ISBN: 978-1937385439

19世紀末から現在に至る戦争博物館・平和博物館の歴史的
分析書で、戦後日本の平和主義的な言説を跡づけている。15年戦
争期の日本の戦争犯罪や戦争責任に焦点を合わせ、1931年の日
本による満州侵略から1945年の敗戦までを扱う。



『反権力的調停者—1914-1918年の戦争への抵抗： 英国国教会の視点から』



著者：クライヴ・バレット (INMP理事)
ルターワース出版 (ケンブリッジ) 310頁
ISBN: 978-0718893675

本書は、戦争に対する強力かつ組織された抵抗の物語を描いたもので、軍事化され分断された社会で平和を確保するためにたたかった平和組織や詩人、伝道者、政治家、女性や働く男性を描いている。INMP 理事である著者は、イギリス協会が、こうした抗戦活動に意外な場を与えていたことを明らかにする。



『1914年～2014年の戦争の100年、平和及び平和運動の100年』

著者：ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン（INMP統括コーディネータ） 14頁

本稿は、2014年2月に行なわれた第11回「平和のための協力に関する戦略会議」の開会演説で、平和のための博物館国際ネットワーク（INMP）の統括コーディネータであるピーター・ヴァン・デン・デュンゲン氏が非常に情報豊かなスピーチを行なった。論文は（INMPの出版物に関するウェブサイトおよび“World Beyond War”〈戦争をこえた世界〉のウェブサイトで閲覧できる）、第1次世界大戦についての国家主義的・軍事主義的解釈を批判する非常に良い基礎を与えている。



『他者への思いやり（ubuntu）術—サハラ以南のアフリカで受けつがれる思いやりと平和維持の心』（*The Ubuntu Stratagem. Utu and Peace Sustaining Heritage of Africa South of the Sahara*）

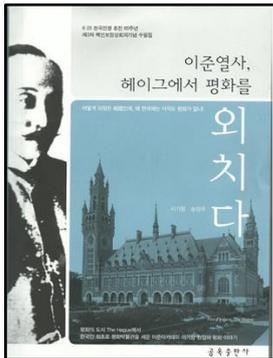
著者：スルタン・ソムジー『アフリカ平和ジャーナル』

本稿は、南アフリカの遺産についての優れた、そして美しい画像つきの記事です。

<http://www.africanpeacejournal.com/the-ubuntu-stratagem/>



『「韓国の平和」を求めるハーグでのイ・ジュンの訴え—朝鮮半島にいまだに平和がないのはなぜか？』



著者：キー・ハンリー、チャン・ジュソン
ゴンオク（ソウル） 206頁（写真多数、韓国語）
ISBN: 978-8992775083

本書は、ハーグのイ・ジュン平和博物館（INMP 会員）の館長夫妻によって書かれたもので、1995年の開館以来の同館の記念事業や教育活動を紹介している。著者は、長年の夢である朝鮮半島の非武装地帯あるいはその近くへの平和博物館の創設についても記述しているが、パク・クネ韓国大統領がアメリカ議会で演説した「非武装地帯平和公園」内への解説が理想的だろう。

紹介

INMP 新理事

2014年7月、INMPはその理事会と諮問委員会の半数のメンバーについて選挙を行なった。他の半数の任期は2017年までである。理事会は、INMPの政策の詳細および財政に関する決定に責任を負う。諮問委員会は理事会にアドバイスを与える。

選挙結果は次のようであった。

—理事会は10人の執行理事で構成される。5人は継続、2人が再選（スティーヴ・フライバーグとジェラルド・レスブルック）、3人が新たに選ばれた（下記紹介記事参照）。

—諮問委員会は12人のメンバーで構成される。6人は継続、3人が再選（シャリア・カーテリ、キム・ヨンファン、エリック・ソーメルス）、3人が執行理事から移行（ジョイス・アップセル、ロジャー・メイヨー、イラッチェ・モモイティオ）となった。

完全なリストはINMPのウェブサイトを見られたい。

3人の新理事は、すべてINMP加入の組織に属している。

【新理事】

●リヴ・アストリッド・スヴェルダップ (*Liv Astrid Sverdup*)

彼女は、ノルウェイのオスロにある「ノーベル平和センター（Nobel Peace Center）」の展示部門の部長およびセンターの副所長で、オスロにある「国際児童芸術ミュージアム（International Museum of Children's Art）」の理事でもある。2005年の「ノーベル平和センター」の開所以来、彼女はオス

ロやブラッセル、ケープタウン、ダッカ、ロンドン、ワシントン DC などでの 50 以上の展示の責任者であった。

●ジャスパー・マグヌソン (Jesper Magnusson)

彼は、2007 年以来、スウェーデンのウプサラにある「平和の家」(Fredens Hus) の館長を務めている。彼の就任以来、「平和の家」は大きく変化し拡張された。館員も 2 人から 20 人に増加した。現在では毎年 2 万人の人々を教育し、20 以上の都市で様々な活動を行っている。

●チャン・クドー (Koo-do Chung)

彼はノグンリ国際平和財団 (No Gun Ri International Peace Foundation) の理事長で、ノグンリ平和記念館 (No Gun Ri Peace Memorial) の館長を務めている。彼はまたロンドン大学の客員教授として経営学、人権などを教え、「韓国消費者文化協会」理事でもある。



スヴェルダップ理事 マグヌソン理事



チャン理事

ニュース

2014 年度カーネギー・ワテラー平和賞

紛争調停者であり国連外交官でもある前アルジェリア外相のラクダール・ブラヒミ氏に 2014 年 11 月 27 日、2014 年度カーネギー・ワテラー平和賞がピース・パレスにて授与された。カーネギー財団は、平和交渉および紛争地域の再建における専門性に裏付けられたブラヒミ氏の国際調停者としての努力に対して「平和賞」(賞状と賞金 3 万 5 千ユーロ) を与えた。

ラクダール・ブラヒミ氏 (1935 年生) は、アフガニスタンとイラクにおける国連代表であった。2014 年 5 月まで、ブラヒミ氏はシリアに対する国連特命全権平和大使として働いた。彼は The Elders (ジ・エルダーズ。世界平和に関与する前国会議員からなるシンクタンク) のメンバーである。

カーネギー・ワテラー平和賞は 2 年毎に、「国際行動、文学、芸術など、どんな方法であれ、言葉または行動によって」、国際平和の大義を推し進めた人物または組織に与えられる。平和賞はピース・パレスにおいて授与される。その名称は、オランダ人の銀行家ヨハン・ワテラーから取られている。遺言書 (第 1 次世界大戦の最中の 1916 年に書かれた) において彼は年度毎の平和賞創設のために莫大な資金を残した。1927 年の死後、最初の平和賞が 1931 年に与えられた。それは世界で 2 番目に古い平和賞で、アルフレッド・ノーベルの創設になるもの (ノーベル平和賞) が第 1 である。2016 年にはワテラーの遺言書からの 100 周年を記念し、INMP はピース・パレスの協力を得て展示とシンポジウムを行う予定である。またこの重要な、あまり知られていない平和・博愛主義者の (初めての) 伝記を出版する予定でもある。



ニュース

2014 年度ノーベル平和賞

今年のノーベル平和賞は、「子どもや若者の抑圧に反対する闘争およびすべての子どもの教育を受ける権利を求める闘争に対して」、インドのカイラシュ・サティヤルティとパキスタンのマララ・ユスフザイの両氏に与えられた。

ユスフザイさんは、パキスタンでの女子教育を推進する努力に対して、2 年前にタリバンによって頭

部に銃撃を受けたことから世界的に知られるようになった。その時から、彼女は女子の教育を受ける権利のための指導的なスポークス・ウーマンとなった。17歳という年齢はノーベル平和賞受賞者の最年少である。

一方、サティヤルティさんは60歳であり、子どもを金儲けのために酷い搾取をすることに焦点を当てて平和的なデモンストレーションを指導するのに、偉大な個人的な勇気を示した。「これは、子どもであることによって剥奪されるすべての子どもたちの大きな名誉である」と彼は言う。

パン・ギムン国連事務総長は、両氏を祝福し、ユスフザイさんに関しては、勇敢かつ穏やかな平和の主張者であり、学校に行くという簡単な行為を通じて世界的な教師となったとし、サティヤルティさんに関しては、子どもの搾取に対して闘うために英雄的な仕事をを行ったとした。

平和賞をイスラム教徒のパキスタン人とヒンドゥー教徒のインド人に与えたことは、両国間および両宗教間に愛のメッセージを送ったことになる。その決定は、言語や宗教の違いにも拘わらず、すべての人々が女性、子ども、そしてすべての人間の権利を求める闘いを行わなければならないというメッセージを与えている。

ノルウェイのノーベル平和賞選考委員会は、2014年のノーベル平和賞に278という記録的なノミネーションを受けた。そのうち47が組織であった。2014年度ノーベル平和賞に関する展示が、2014年12月2日から2015年4月12日までノルウェイのオスロにあるノーベル平和センターで開催される。



戦争博物館における恒久的な平和の展示の幕開き

1年以上、オランダ INMP のメンバーである「平和と非暴力のための博物館」(Museum for Peace and Nonviolence) は、ゴウダ市にある「南オランダ・レジスタンス博物館」Resistance Museum South-Holland と協働作業を行ってきた。期間限定のいくつかの展示のあと、2つの博物館は恒久的な平和の展示の幕開きを行なった。

9月27日(土)に、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン氏(INMP 統括コーディネータ)が、正式に博物館の開館行事に出席し、平和博物館の歴史、戦争博物館との協力の重要性、平和運動を行った何人かの鍵となる人物についての物語などに関するスピーチを行なった。オランダには80もの戦争・レジスタンス博物館があるが、レジスタンス博物館が平和博物館と密接に協働したのは、今回が最初である。



博物館員のノラ・ボッシャー(Nora Bosscher)氏は40人の参加者にこの平和博物館の背景にある物語を話した。新たな恒久展示は、平和に関する思想の歴史を展示している。平和と非暴力が重なる部分は、平和と非暴力をどう考えるか、自分たちに何が貢献できるかに関して訪問者に考えさせるものだ。若い訪問者はビデオやゲームによって情報が与えられ、考えさせられるだろう。最も注目すべきことは、1800年から今日までの平和運動の歴史を示すイメージや展示物が満載された箱が、時間の流れに沿って並べられた作品である。

この大きな展示の幕開きとともに、新たな一時的な展示も行われた。「レン・ムニクが平和週間のた

めに描く」(*Len Munnik Illustrates for the Peace Week*) は、彼がこれまで 30 年にわたってオランダの平和週間のために描いてきたポスターを展示するものだ。芸術家のレン・ムニクはオランダの雑誌や新聞の政治漫画で名高い。

(文 : Girbe Buist)



映画スクリーンにおける近代戦争



INMP のメンバーであるエリック・マリア・レマルク平和センター (Eric Maria Remarque Peace Center) が、戦争および反戦映画のための最初のオンライン・データベースを紹介している。現在では、40 か国以上から、あらゆるジャンルの 800 以上の国際的な映画を保存している。映画スクリーンにおける近代戦争は、「進行中のプロジェクト」であって、もとより完全なものではない。データベースにすでにある映画のコメントやさらなる情報、あるいはあなたが見逃した映画に関する情報をセンターまで寄せていただきたい。

ドイツ語と英語の 2 か国語によるデータベースは、制作年、特定の戦争やテーマ、シーンに関するキーワードなど様々な国のフィルムに狙いを定め、情報を収集している。それは、映像に関する情報、映画の内容の簡単な要約、監督・役者・映画に関わるその他人物の伝記的情報を提供する。

さらにデータベースは、各国アーカイブのどこにその映画が保存されているかに関する情報、種々あるメディアにおける入手可能性、映画目録に関する精選された情報を提供している。可能な限りどこでも、データベースは映画の所有者、貸出し条件、技術的特性などを紹介する情報を保有することになっている。

詳細なキーワード・インデックスによって、特定の戦争 (たとえば第 1 次大戦)、特定のテーマ (たとえばホロコースト)、特定の主題 (たとえば海軍)、あるいはさらにその映画に特有な表現 (たとえば無声映画) を検索できるようになっている。「映画スクリーンにおける近代戦争」は、「ロウアー・サクソニー (ドイツ北西部の州) 科学・文化省」から資金を得ている。

詳細については www.war-film.com を参照のこと。



映画『Twin Sisters』より



2014 年度ヒロシマ記念日

2014 年 8 月 6 - 9 日、INMP メンバーである「ノーモア・ヒロシマ：ノーモア・ナガサキ・ナグプール平和博物館」(インド、No More Hiroshima: No More Nagasaki: Peace Museum in Nagpur, India) は知るための会議を催した。イベントは 8 月 6 日の「ヒロシマ・ナガサキを記憶する日」で始まった。この日はインドの中央政府とラーマン科学センター&プラネタリウムとの共催で行われた。

選ばれた高校生がイベントへの参加に招待され、写真の展示を訪れ、後にクイズを与えられた。





テヘラン平和博物館

8月3-8日、イランからテヘラン平和博物館 (TPM: Tehran Peace Museum) と化学兵器被害者を支援する会 (SCMVS: Society for Chemical Weapons Victims Support) の代表団が広島を訪れた。一行は、広島市長であり平和首長会議の会長でもある松井和實氏に会った。松井氏は、平和首長会議の会員証を TPM のモハンマド・レザイ (Mohammad Rezaei) 氏に渡した。TPM は SCMVS によって創られ、イランの市長を平和首長会議に加入するように活発に呼びかけてきた。現在では、270 ものイランの市がメンバーになっている。SCMVS のナストローラ・ファティアン氏 (Nastrollah Fathian) は 5 年以内にすべてのイランの市長を平和首長会議のメンバーにしたいと語った。

9月21日、テヘラン平和博物館は、国際平和の日のセレモニーを開催した。世界から多くの人々が参加した。セレモニーは戦争被害者であり TPM 館長であるモハンマド・レザ・タギプール氏 (Mohamad Reza Taghipour) のスピーチから始まった。その他バン・キブン国連事務総長からのメッセージ (TPM ウェブサイトで読める) の紹介などが行われた。

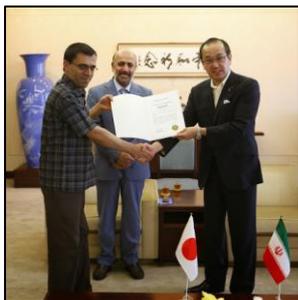
9月23日から10ニューズレター第10号の締め切り

次号のニューズレターは2月に発行される。原稿提出の締め切りは2015年1月1日。テキストと写真を news@inmp.net に送付のこと。名前と所属組織を明記のこと。

月3日まで、5人のTMPの若いボランティア

が立命館大学国際平和ミュージアムを訪れ、文化や教育の分野の交流を行った。立命館大学の学生とも交流した。一行はその他の博物館にも訪れ、平和のための博物館の役割について学んだ。彼/彼女らからは、化学兵器使用の実態や TPM そしてイラン文化の説明があった。立命館国際平和ミュージアムの山根和代副館長とミュージアムのボランティアたちが一行をホストした。

INMP のメンバーであり TPM の創始者の1人であるシャリア・カーテリ博士 (Shahriar Khateri) が、2013年ノーベル平和賞を受賞した「化学兵器禁止機構」OPCW (Organization for the Prohibition of Chemical Weapons) の任務 (OPCW 国際協力・支援における支援・保護部門上級職) に任命された。INMP はシャリア氏がこの素晴らしい任務に選ばれたことを祝福する。これはこの分野での専門性、化学兵器の廃絶と被害者救援における彼の貢献の賜物である。



2014年度平和のためのグローバル・アート・プロジェクト

2014年を通じ、INMP 理事のカトリーヌ・ジョステン氏 (Katherine Josten、平和のためのグローバル・アート・プロジェクトの創始者でありディレクター) はとても多忙だった。プロジェクトを通じ、1万5千人もの人々が作品を創り、展示し、平和的かつ協力的な世界に関する各自のビジョンを交換し、平和の諸問題や平和教育の教材に関して対話を行った。何千もの生徒・学生—今年初めのウクライナでの政治不安の中におけるウクライナの生徒・学生も含む—がプロジェクトに参加した。カトリーヌはまた世界中から 2000 の人々が参加したトルコのイスタンブールで行われた平和行事に招待され、プロジェクトを紹介した。



ニュース

平和教育会議

9月22-23日、化学兵器を禁止する会（OPCW）は、「平和のための教育——化学兵器軍縮を確実にするための新しい道」と題して、ハーグにある本部で新趣向の会議を開催した。

INMPのメンバーであるテヘラン平和博物館—エリザベス・ルイスが代表を務める—は、同館の最近の2つのオーラル・ヒストリーのプロジェクトを紹介した。第1の記録は、化学兵器攻撃のサバイバーによる目撃証言であり、それらの物語はインターネットを通じてペルシャ語と英語によって共有される。

第2は、*The Young Reporters* と呼ばれる新しい平和教育の試みである。これは中等学校および高等学校の学生をテヘランの博物館に連れてきて、イラン-イラク戦争における化学兵器攻撃のサバイバーへのインタビュー・プロジェクトに学生たちを参加させる。こうした方法はテヘランの若者に被害者の生の現況に関してより良い理解をもたらす。それはまた、化学兵器の軍縮の思想および環境の中での平和の文化の建設における責任に彼/彼女たちを導くものである。個人の証言および生残者へのインタビューは共にテヘラン平和博物館のウェブサイトで見ることができる。

ニュース

戦争の非合法化

INMPは10月18-19日に戦争の非合法化に関するハーグ会議における円卓会議として集まった10数団体の平和NGOのうちの1つであった。会議は平和のための「カナダ女性の会」によって提案された。参加団体は、以下の通りです。

Canadian Voice of Women for Peace
 International Network of Museums for Peace (INMP)
 The International Peace Bureau
 International Institute for Peace Education
 Women Peacemakers Program
 World Federalist Movement
 Movement for the Abolition of War
 Spanish Association for International Human Rights Law
 Transcend International
 Permanent Court of Arbitration
 International Court of Justice
 International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia
 Hague Conference on Private International Law



会議の主要な目的は、将来の拡大された対話とこのテーマに関する市民社会グループの行動に資するために開かれた討議を組織することであった。勧告を含む同意文書はいま準備されつつある。戦争の犯罪化および違法化、またそうした条文（日本国憲法第9条など）を含む憲法や軍隊の無い国（コスタリカなど）などの関連するテーマは、世界の多くの平和ミュージアムに展示されている。これらの展示は戦争の非合法化の推進に寄与している。戦争の非合法化というこの課題は、多くの国々が第1次世界大戦を記念する現在において、議論と行動のための最適のテーマである。

ニュース

『沈黙の恥』——1つのレビュー

中国の南京にあるJジョン・バーベ記念館（John Rabe Memorial Hall）のボランティアであるスン・ジャイ（Sun Jiayi）さんから、2010年に受賞した日本の戦争犯罪に関するドキュメンタリーについてのニュースが送られてきた。

泉谷明子氏の『沈黙の恥』（*Silent Shame*）は、日本生まれの映像作家が第2次世界大戦における自

分の国が犯した戦争犯罪への関与に関する隠された真実、またそれが今日の社会に与える影響と向き合うための旅に関する作品である。子ども時代から、彼女は人間に関心を抱いてきた。『シンドラーのリスト』を見てから、痛切なしかししばしば語られない物語を広く社会に伝えるのに映像の持つ大きな力に彼女は深く印象づけられた。

第2次世界大戦におけるアジアでの日本の戦争犯罪をもっと多くの人々がなぜ知ろうとしないのか。多くの日本人があまりにも苦痛を感じるために探究しようとしないう過去を映像は掘り下げていく。コリアンのレイプ被害者への、また日本人の加害者へのインタビューは、第2次大戦のしばしば忘れられた被害者に声を与えるものである。1つの貴重なインタビューにおいて、1人の元日本兵は人体実験をいかに手助けしたかを詳細に語っている。このフィルムを作る過程において、泉谷氏は多くの研究者や実践家が日本の右翼によって妨害を受けた事実を知ることになった。

スン・ジャイ氏は泉谷明子氏やインタビューを受けた人々（日本の元兵士、従軍慰安婦、活動家）に対して敬意を抱くようになった。それらの人々は、真実を明らかにし、結果に責任をとろうとしているからだ。それらの人々には、ジョン・ラーベ記念館を勇敢にも自発的に訪れる日本のボランティアたちも含まれる。曰く、「政府は真実を提供してくれなかった。私たちがここに来るのは真実を求めてのことだ。私たちは過去を正しく扱いたい」と。こうした「平和の戦士」は、スン・ジャイ氏の日本人に対する見方を変えることになった。この事例は、平和のための博物館で働く国際ボランティアたちのインパクトはとても広範囲であることを示している。



「平和の訴え」プロジェクト

INMPは最近、ロビン・コクソン氏（Robin Coxson）を新メンバーとしてそのネットワークに迎え入れた。彼は芸術家であり、詩人であり、平和運動家である。南アフリカのケープタウンでいくつもの組織とともに活発に活動している。

彼の「平和の訴え」プロジェクトと音楽は、持続的な平和を求めて、紛争解決や理解を目指す選択としての非暴力を促進するためのイニシアティブである。それは音楽をも包んでいる。マハトマ・ガンジー、ノーベル平和賞受賞者、平和活動家の詩的な言葉を音楽に乗せ、小学生がそれを演奏する。また、ガンジーを名誉ノーベル平和賞に推薦するようノルウェイのノーベル委員会に呼びかける署名をオンラインで行っている。さらには、学生や先生のための「ピース・クラブ」を作り、彼らがノーベル平和賞受賞者や平和活動家の歴史的・政治的・社会的な諸側面を学習し、非暴力のライフスタイルを進めることができるようにしている。

「ピース・クラブ」は毎月、平和賞受賞者や平和活動家を讃えるような、様々な活動によって目標を達成している。毎月、生徒たちはその人物の生き方やその背景を調べ、自分たちの生き方を反省している。「ピース・クラブ」はケープタウンの高校にも広がりつつある。国際的には、コロンビア、イスラエル/パレスチナ、メキシコ、米国の個人や組織とインフォーマルな協働がすでに始まっている。

（文：ロビン・コクソン）



不服従な物体

この魅力ある、オリジナルな、そして適切に名づけられた展示（2015年2月1日までロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム〈Victoria & Albert Museum〉で行われる）は、世界

中での社会変革のための運動で決定的な役割を果たした多くの種類の物体を展示する。それは展示物に内在する力、平和行動が芸術とデザインにおける創造力をいかに活性化するかを示す。展示物としては、旗、記章、ボタン、価値のなくなった銀行券、空気で膨らませる石（デモ用の傷害性のない立方体、写真参照）、バリケードやブロケードを作るための道具、マスク、トラックなどである。時代は1970年代から現在までを主な対象としている。コンピュータで示された図によると、グラスルーツの行動や抵抗運動は世界的に増加している。ディスプレイ上の物体のいくつかは、20分間の映像として大画面に、抵抗のドラムや歌やがなり立てる演説などの音声と共に写し出され、本物のように見える。紹介される抵抗運動には、占拠運動（Occupy Movement）、ゼネスト、女性社会・政治組合（Women's Social and Political Union）、ザパティスタ革命（Zapatista Revolution）、パレスチナのインティファダが含まれる。



展示と共に作られた本には、博物館員による抵抗や行動に使われた物体の歴史に関するエッセイ、特定の物体に関するエッセイが載っている。『ジ・インデペンデント（The Independent）』紙のレビューはこの展示を、「今年の最も爽快なそして重要な展示の1つだ」としている。



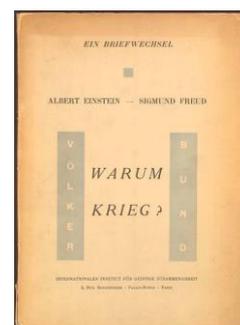
平和にチャンス

魅力的な展示が、2014年11月まで「ハーグ・ムセオン（Museum, The Hague）で、化学兵器禁止機構（OPCW）、旧ユーゴ法廷（Tribunal for the Former Yugoslavia）、国際司法裁判所（International Court of Justice）などハーグにある8つの国際的な組織の協力で行われ、展示品や簡単な文書（オランダ語と英語）で示された。展示物には、長崎を破壊したファット・マンの大きな彫刻、攻撃を生き延びた2人のオランダ人捕虜に関する展示品、佐々木禎子さんの物語などがあつた。さらに、7人のノーベル平和賞受賞者、平和宮（Peace Palace）、今年の初めにハーグで行われた「第3回核安全保障サミット」に関する展示が行われた。参加者は平和に関する自分の思想や希望を書いて大きな「平和の木」につるすことができた。



なぜ戦争か？

アインシュタインとフロイトは「なぜ戦争か？」という問いに関して手紙の交換を行っていた。それは1933年にいくつかの言語で公刊され、戦争と平和に関する文献中の古典となった。第一次世界大戦の勃発100周年と時を同じくして、ロンドンのフロイト博物館で素晴らしい展示が行われ（2014年8-9月）、アインシュタインからフロイトへの「戦争の脅威から人類を救う方法はあるか？」との問いを再び取り上げた。ここで述べられた主要なテーマは、戦争の起源・喜悅・幻想、精神に対する戦闘（プロパガンダ）、戦争は避けられるか、などである。フロイトによるオリジナルな手稿、古代彫刻の彼の広範な収集物からの展示が行われた。そして前線に従軍していた彼の息子マルティンからの手紙で最も興味深いもののいくつかも展示された。博物館全体にわたって、現代作家、小学生、そして「若手詩人ネットワーク」（Young Poets Network）のメンバーによる「なぜ戦争か？」の問いに関わる多彩な作品が展示された。訪問者も自分の考えを記帳することができた。



アルベルト・アインシュタイン博物館プロジェクト

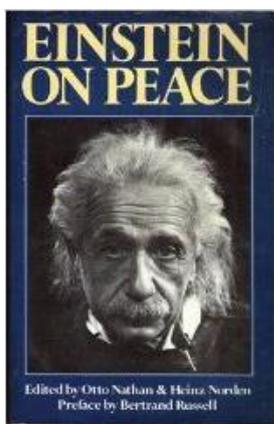
2012年6月、イスラエル政府はエルサレムのスコプス山上にあるヘブライ大学にアルベルト・アインシュタイン博物館を建設することに対する支援を全会一致で投票した。最初に政府審議官であるツヴ

アイ・ハウザーによって示唆されていたそのアイデアは、当時のイスラエル大統領のシモン・ペレスによって熱烈に取り上げられた。この 1994 年度のノーベル平和賞の受賞者は、大規模な 25 階建ての建築物を建てれば、観光客を多く惹きつけることができると夢想したのであった。建設は 2015 年に開始され、2017 年の完成が予定されている。計画によれば、博物館はヘブライ大学が所蔵している理論物理学者アインシュタインの遺産からの多くの展示物が展示されることになっている。ヘブライ市とともにヘブライ大学もこの計画を支持している。プロジェクトの重要性と成功に関して少しの疑義もありえない。何しろ、20 世紀の最も偉大な精神と一般に見做され、タイム誌において「(20) 世紀の偉人」と称された科学者にしてヒューマニストにその博物館が捧げられるのだから。

INMP はこの素晴らしいプロジェクトの実現を待ち望むものである。そして、卓越したメンバーとしてこの新たな博物館を歓迎するものである。科学者としての情熱的かつ生涯にわたる世界の統一と平和への関与を前提にすれば、少なくともその一部は平和博物館とも見做せるであろう。アインシュタインは、第一次世界大戦が勃発したちょうど 100 年前に戦争反対の活発な運動に関わっていた。1914 年 10 月、ベルリン大学のたった 4 人の教授の 1 人として、彼は「ヨーロッパ人へのアピール」と題する声明を共同起草し、これに署名した。これは「93 人声明」に因って起草されたものである。「93 人声明」は「文明世界への声明」と呼ばれ、1914 年 8 月、93 名の著名なドイツの知識人・芸術家が彼らの国によって始められた戦争を支持するものであった。



1955 年にアインシュタインが亡くなったとき、英国の哲学者バートランド・ラッセルが署名した文書にアインシュタインも署名していた。それは核軍縮を訴えるパグウウッシュ運動の基礎的な文書となるものであった。



この間 25 年の間、彼は絶えず戦争と軍国主義に反対し続け、情熱的に国際主義と世界平和を促進した。アインシュタインの生涯のこの側面——それはほとんど知られていない——が彼の友人であり秘書であり、彼の遺言の実行者であったオットー・ネーマンによって余すところなく文書化されたのはわれわれの幸運である。アインシュタイン没後 5 年目に、ネーマンは（ハインツ・ノーデンと共に）、『アインシュタイン平和書簡』（1960 年、ニューヨーク）と題する内容のある魅力的な書物を編集した。

アインシュタインは世界政府の樹立による戦争の防止だけではなく、その廃絶をも訴えた。第一次大戦後 100 年の現在において、勇気をもって戦争に反対した人々——アインシュタインのそれも含め、その声は荒野に孤立したものであった——を思い起こすことが重要である。

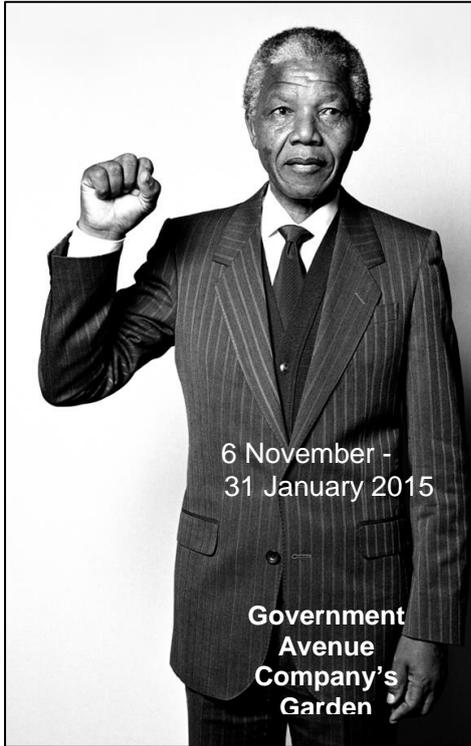
アインシュタイン・アーカイブにあるオリジナルな文書と共に、『アインシュタイン平和書簡』は、アルベルト・アインシュタイン博物館が彼のあまりにも知られていない人生の側面を描き出すことを可能にするだろう。そしてそのことは今日の世界のピースメーカーにインスピレーションと励ましを与えるだろう。

【INMP の新会員】 前回のニューズレター以後の INMP の新会員は次の通り。

British & Commonwealth Peace Museum、スコットランド
My Peace Palace Collection、オランダ
Stichting Cast Lead、オランダ



ケープタウンにおける平和を作る展示



この展示会は、1世紀に及ぶ平和創造の努力や世界中の平和活動家に賛辞を贈る非常にパワフルな展示会だ。同時に、市民たちにあらゆる種類の平和活動への参加を促し、それによって世界の平和文化を促進することを呼びかけている。

フェデリコ・マイヨール・ザラコザ
(平和文化機構代表／前ユネスコ事務総長)

世界平和評議会 (IPB) の制作によるもので、「平和をつくる」展は最も広義の平和活動を反映しており、人々や組織がどのように 20 世を形作り、影響を与えたかについて紹介している。世界大戦や多くの紛争があった一方で、人々が冷戦や人種差別を終わらせ、対人地雷を禁止する面で、また、国際刑事裁判所を創設するために重要な役割を果たしたが、それらは多くの点で市民社会の努力の成果である。

展示会が持続可能な平和を創造するためには5つの基本的要素があることを説明し、とりわけ若者たちに活動への参加を呼びかけていることは重要である。

日本語版編集後記

「平和のための博物館国際ネットワーク (INMP)」のニューズレター第9号 (翻訳版) をお送りします。もう少し早くお送りできるよう準備をすすめましたが、翻訳・編集作業に思いがけない時間がかかり、結果的に 2015 年を迎えてしまいました。翻訳は、「トランセンド」運動にも取り組んでいる藤田明史さん (立命館大学非常勤講師) の協力を頂き、INMP 執行理事の山根和代、同諮問委員の安齋育郎が調整に当たりました。

INMP は現在財政的に非常に厳しい状況にあり、2014 年 9 月の韓国ノグンリでの第 8 回国際平和博物館会議の会期中に開かれた総会でも論議された通り、ハーグの事務所や有給のパートタイム事務局員を手放さざるを得ない状況です。

そこで、INMP は 2015 年から新たな体制と意気込みで活動に取り組み、理事が会務を分担してそれぞれの力を尽くすことが期待されています。実は、INMP のニューズレターの発行には 2015 年から山根和代執行理事と安齋育郎諮問委員が責任を負うことになっており、関西在住のピースメーカーであるロバート・コワルチェックさん (元近畿大学教授で、写真家でもあります) も協力して頂けることになっています。コワルチェックさんは本号でも紹介されている「ピース・マスク・プロジェクト」に取り組んでおり、日本事情にも精通した平和活動家です。

INMP 日本会員の皆さんが世界に発信したいニュースがあれば、下記宛先に郵送またはファックスして頂くか、山根 (ky5131jp@fc.ritsumei.ac.jp) または安齋 (jsanzai@yahoo.co.jp) 宛にメールしてください。記事はなるだけ簡潔を心がけて頂ければ幸いです。

※発行：〒600-8216 京都市下京区東塩小路 547-4 ステーションコートヤード 802
安齋科学・平和事務所 (FAX: 075-741-7282)